

第6節 美園遺跡出土のS字状浮文土器について

関西大学 萬谷幸美

1 はじめに

美園遺跡では、口縁部にS字状の浮文を有する土器が計4点出土している。同様の浮文を有する土器例としては、岡崎遺跡採集資料⁽¹⁾、国府遺跡出土資料⁽²⁾、越水山遺跡採集資料⁽³⁾、邨東遺跡採集資料⁽⁴⁾、長越遺跡D17区黒褐色層⁽⁵⁾、東奈良遺跡小川水路採集資料⁽⁶⁾、安満遺跡9地区土壇⁽⁷⁾、竹松遺跡採集資料⁽⁸⁾などが挙げられる。各資料とも1遺跡につき1例のみであり、しかも長越遺跡、安満遺跡例を除いては、採集資料がほとんどである。美園遺跡では、4点の出土資料が各々遺構との関連を把握できるため、他遺跡に比べてS字状浮文土器の性格を考える上で有効な資料となろう。

ここでは、4点の遺跡について順次記載した後、S字状の意匠について若干検討してみたい。

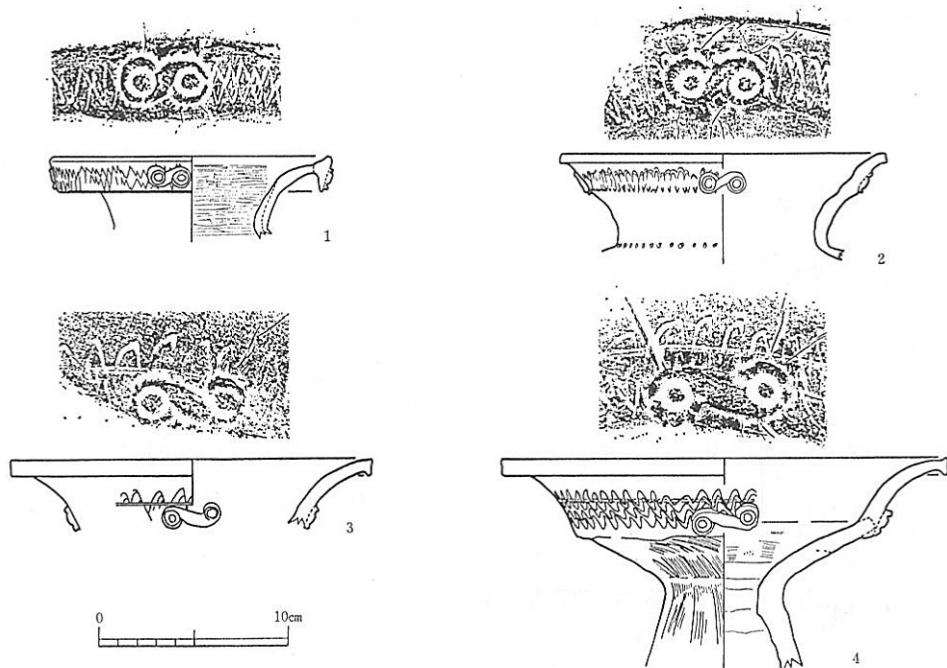
2 美園遺跡出土資料について

第437図1は、Dトレンチ東矢板土層観察アゼ庄内包含層下部より出土した。土層観察アゼ出土のため遺構は明らかにし得ないが、当該期の集落の南限を示すと思われる溝(D S D323)付近であるため、これに伴う可能性を有する。溝(D S D323)からは、甕形土器(以下「形土器」は略)、手焙りが出土している。資料は広口壺であり、口縁端部に粘土を貼りつけて垂下させ、端面に装飾を施している。篋状施文具を用いて鋸歯文状の波状文を二条巡らせ、その上にS字状浮文を4箇所貼付する。その具体的方法としては、円形浮文を2つ3mm程度の間隔をもって貼付し、その間を粘土紐でつなぎナデつけてS字状にし、その上に2箇所竹管を押捺したことが伺える。ここで注意を要するのは、円形浮文と粘土紐の接合部のうち、狭角をなす点、すなわち「S」字の最初と最後の点は、施文具で刻むなどして明確にされていることである。これは他の3点についても看取でき、これらの浮文をS字状浮文たらしめていると言えよう。胎土は石英粒を多く含み淡橙色を呈するため、在地産のものとは若干異なるようである。なお、この胎土は他の3点にも共通するものであり、4点は同じ所で製作された可能性をもつ。

時期は、口縁部の形状、伴出遺物から、畿内第Ⅴ様式後半に位置付けられる。

2は、3DトレンチD S D316際の土器群から検出された資料である。伴出遺物としては、器台、口縁に鋸歯文と竹管円形浮文を有する二重口縁壺が挙げられる。資料は、口縁部が緩やかな稜をなしてたちあがる二重口縁壺で、口縁部には鋸歯文状の波状文を二条巡らし、S字状浮文を貼付する。残存部から、浮文は全周で6ヶ所貼付されていたと推定できる。頸部～肩部接合部には刺突文が施されている。

時期は、二重口縁の形状、伴出遺物、出土遺構から畿内第Ⅴ様式後半に比定される。



第437図 S字状浮文をもつ土器（※拓本は縮尺1/2）

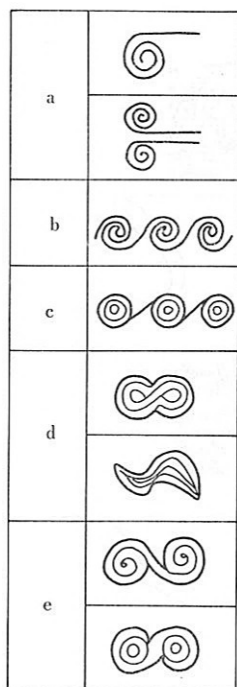
3は、3DトレンチDSK307付近出土である。先述したDS D316の北方1m付近において、鉢、器台とともに出土した。残存部の観察からは、器種が、器台か二重口縁壺かは判定し難い。この資料もまた、鋸歯文状の波状文が施され、その上に篋描きの直線文が1条巡っている。S字状浮文は1箇所残存しているが、残存部僅少のため全周で何箇所貼付されていたかは不明である。

伴出遺物から、畿内第Ⅴ様式後半から庄内式期初頭にかけての時期に比定される。

4は、3DトレンチDS D316内の土器群から出土した。同遺構からは、甕、器台が出土している。脚部は中空であり、受部は脚部より連続成形されている。この様な、受部が二重口縁の形状を示す器台の類例としては、府中遺跡、馬場川遺跡例などが散見され、北鳥池下層式から庄内式併行期に多く流布したようである。1条の篋描き直線文の上に鋸歯文状の波状文を2条施しているが、施文具の当たりによって4条になる箇所も見受けられる。S字状波文は1箇所残存しており、全周では4箇所貼付されていたと推定できる。

時期は、伴出遺物より畿内第Ⅴ様式終末と考えられる。

2、3、4は、3D内及びその付近から集中して出土している。また、DS D316以南では、土器の出土が稀薄になることから、DS D316が集落の境界をなした可能性があり、ここでは他に鋸歯文の上に竹管円形浮文を施した壺口縁部や手焙りも出土していることを勘案するならば、この付近は集落において特殊な機能を果たし得た場ではないかと考える。



第438図 S字状浮文模式図

以上、美園遺跡出土のS字状浮文を有する土器及び出土遺構について概観した。S字という特殊な意匠は、型押しや篋描きによる渦文、連続渦文とともに古くから着目され、佐原眞・町田章両氏による分類⁽⁹⁾、今里幾次氏による「祭紋」とでも仮称すべき概念存在の想定⁽¹⁰⁾が行われてきた。渦文をもって総称されるこうした意匠は、確かに銅鐸、銅剣などの青銅器をはじめ、手焙り、器台などの特殊な土器や円筒埴輪に施文されることが多く、今里氏の見解はこうした面からも肯定できよう⁽¹¹⁾。しかし、この意匠については、従来遺物面からのみ意義付けが試みられており、遺構面からは推察し得ない状況であった。こうした状況のなか、美園遺跡において、先述したような性格をもつ遺構に伴いS字状浮文土器が集中して検出されたことは、所謂「祭紋」がもつ意義を解明するにあたって、具体的様相を想定する一助となろう。

3 S字状意匠について

S字という特殊な意匠は、その施文方法などによりS字状文や連続渦文など様々な文様に見られるが、概ね5類に大別できる。以下各類について説明を加えたい(第438図)⁽¹²⁾。

a類 渦文の先端がまっすぐに伸びる蔽手文である。全て型押し文であり、単体で施文するものと複数で施文するものの2種類がある。池上遺跡例では流水文の上に押捺しているが、他の3遺跡例は重複して押捺しており面的な広がりをもつ。

b類 連続渦文と称される文様で、篋描きのものと型押しものの2種類がある。口縁部などの外周を巡り施文される。

c類 連続渦文に類似する文様で、竹管を押捺し篋描き直線で連結したもの、同心円文を押捺し連結したもの、竹管円形浮文を連結したものなど様々な施文方法をとる。いずれも口縁部など外周を巡り連続施文される。

d類 S字状渦文であり、類似する文様として鳥形文が挙げられる。文様は連結されず単体で施文され、全て型押し文である。口縁部や肩部の外周を巡る。

e類 S字状浮文である。粘土紐をS字状渦文状に貼付するものと、美園遺跡例のように、竹管円形浮文を粘土紐で連結したものの2種類がある。いずれも単体の文様で口縁部外周に数個貼付されるが、波状文の上に施される例が多い。

a～e類には第30表に掲げた諸遺跡の例が該当する。⁽¹³⁾

弥生時代中期後半、各類の分布を概観すると(第439図)、a類は畿内及びその周辺に顕著であり、b類は播磨・吉備に、c類は吉備に集中する傾向を示す。唐古遺跡では、a類・c類ともに存在するが、c類の施文方法は吉備の各例に比して稚拙であり、次期の文様とは異なるため、c



第439図 各時期における分布

類の出自はやはり吉備に求められよう。⁽¹⁴⁾

弥生時代後期前半に入ると、各類とも畿内及びその周辺部に集中する。a類・c類・d類が存在するが、その中でc類が多くを占め、当時期のS字状文様はc類が主流であったと言えよう。

弥生時代後期後半、c類にかわりe類が畿内及びその周辺部において顕著となる。b類・d類は、美作・伯耆・隠岐に認められる。⁽¹⁵⁾

古墳時代前期前半に入ると、d類が越前・加賀に分布し、e類は播磨・畿内・加賀の各地に認められる。

以上のような分布と時期を勘案し、各類について概観するならば、次のことが言えよう。

a類は、弥生時代中期後半、畿内にその出自が求められるが、弥生時代後期前半以後は各地に認められず、比較的短期間に畿内及びその周辺部においてのみ用いられた文様であると言えよう。一方、b類・c類はその出自を、弥生時代中期後半の吉備及び播磨に求められる。b類は当地方においてのみ流布したと推察されるが、c類は弥生時代後期前半に入ると畿内において流行し後半まで用いられたことより、当該期吉備に出自を求められるものが畿内にもたらされ受容される具体的現象の一例と言えよう。d類は弥生時代後期前半、摂津に認められるが、後期後半から古墳時代前期前半にかけては、伯耆から越前・加賀といった日本海側に多く流布し、この時期の当地方間の交流が示唆される。e類は弥生時代後期後半、畿内において出現し流布した文様であり、古墳時代前期前半に入ると播磨や加賀にも散見される。当時期の畿内から各地へ向かう広範囲の流通を示す一例となろう。

S字の意匠において、その出現、消長からa類→b類→c類→d類→e類という系譜を想定することは、やや困難な感が存するが、少なくともこうした同類の意匠が弥生時代中期後半から古墳時代前期前半にかけて、吉備から畿内地方で主に用いられ、漸次東へ波及

していった事象は肯定できよう。

4 おわりに

美園遺跡出土のS字状浮文土器は、以上のような一連のS字装飾をもつ土器の中で、弥生時代後期後半から古墳時代前期前半の畿内における「祭紋」土器の典型的な例であることが明示できた。弥生土器や古式土師器に見られる所謂特殊土器のなかで、弥生時代中期後半から古墳時代前期前半にかけては、S字意匠をもつ土器は「ハレ」の土器としての役割の一部を担ったものと考えられる。

第30表 S字状意匠を有する土器一覧表

No.	遺 跡 名	所 在 地	出 土 遺 構	器 種	施文部位	施 文 方 法	類
1	唐 古	奈良県磯城郡田原本町	不 明	不 明	不 明	型 押	a
2	"	"	82号地点堅穴	壺	肩 部	"	"
3	池 上	大阪府和泉市		"		"	"
4	奈カリ与	兵庫県三田市	北 斜 面	甕	肩 部	"	"
5	仲 田	兵庫県朝来郡山東町	採 集	不 明	不 明	"	"
6	亀井・城山	大阪府八尾市	S D 3008	壺	体 部	"	"
7	百 間 川	岡山県岡山市	右岸用水路調査区20	"	口縁部	篋 描 き	b
8	西 田 原	兵庫県神崎郡福崎町	採 集	"	"	型 押	"
9	下 市 類	岡山県真庭郡落合町	D調査区井戸Ⅱ	傘(?)	体 部	篋 描 き	"
10	篠 原	兵庫県神戸市	採 集	椀(?)	口縁部	型 押	"
11	雄 町	岡山県岡山市	第1調査区甕棺	器 台	"	"	c
12	門 前 池	岡山県赤磐郡山陽町	11号住居址	壺	"	竹管円形浮文 篋 描 き	"
13	天神原	岡山県津山市	pit 4401	器 台	脚 部	"	"
14	唐 古	奈良県磯城郡田原本町	北方砂層	不 明	不 明	竹管押捺 篋 描 き	"
15	会 下 山	兵庫県芦屋市	E 住 居 址	壺	口縁部	竹管円形浮文 篋 描 き	"
16	亀井・城山	大阪府八尾市	自然流路NR3001	壺	口縁部	型 押	"
17	上ノ山	奈良県橿原市	採 集	壺(器台?)	"	"	"
18	上 津 島	大阪府豊中市	不 明	壺	"	竹管円形浮文 篋 描 き	"
19	"	"	"	"	肩 部	竹管押捺 篋 描 き	"
20	下 阪 瀬	岡山県真庭郡落合町	"	不 明	不 明	型 押	"
21	田 能	兵庫県尼崎市	"	手焙り	腹 部	竹管押捺 篋 描 き	"
22	荒 神 山	兵庫県神戸市	第 2 地 点	壺	口縁部	"	"
23	篠 原	"	採 集	"	"	型 押	d
24	下 市 瀬	岡山県真庭郡落合町	D 調 査 区	不 明	不 明	"	"
25	廻 山	富山県射水郡小林町	不 明	"	"	"	"

26	中 峯	鳥 取 県 倉 吉 市	採 集	〃	〃	〃	〃
27	王 山	福 井 県 鯖 江 市	不 明	〃	〃	〃	〃
28	河 和 田	福井県丹生郡朝日町	〃	〃	〃	〃	〃
29	中 釜 屋	石川県石川郡尾口村	〃	〃	〃	〃	〃
30	松 任	石 川 県 松 任 市	〃	〃	〃	〃	〃
31	美 園	大 阪 府 八 尾 市		壺	口縁部	貼 付	e
32	〃	〃		〃	〃	〃	〃
33	〃	〃		壺(器台?)	〃	〃	〃
34	〃	〃		器 台	〃	〃	〃
35	越 水 山	兵 庫 県 西 宮 市	採 集	壺	〃	〃	〃
36	国 府	大 阪 府 藤 井 寺 市	不 明	〃	〃	〃	〃
37	岡 崎	京 都 府 京 都 市	採 集	〃	〃	〃	〃
38	安 満	大 阪 府 高 槻 市	9 地区土壌3	〃	〃	〃	〃
39	瓜 破 北	大 阪 府 大 阪 市	井 戸 S E 0 2	〃	肩 部	篋 描 き	(〃)
40	林	京 都 府 竹 野 郡 網 野 町	黒 色 土 下 層	器 台	口縁部	〃	(〃)
41	東 奈 良	大 阪 府 茨 木 市	採 集	壺	〃	貼 付	〃
42	竹 松	石 川 県 松 任 市	〃	器 台	〃	〃	〃
43	邨 東	兵 庫 県 姫 路 市	〃	壺	〃	〃	〃
44	長 越	〃	D17区黒褐層	壺(器台?)	〃	〃	〃

註(1) 飛野博文「山城の弥生後期の土器」『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和56年度』京都大学埋蔵文化財研究センター 1983

(2) 直良信夫「二・三弥生式土器の紋様について」『考古学雑誌』第19巻第4号 1929

(3) 村川行弘・森岡秀人「弥生時代」『新修芦屋市史 資料編第1巻』 1976

(4) 松下勝他「兵庫県文化財調査報告書第12冊 播磨長越遺跡」兵庫県教育委員会 1978

(5) 註(4)文献

(6) 「東奈良遺跡発掘調査概報Ⅰ」東奈良遺跡調査会 1979

(7) 「高槻市文化財調査報告書第10冊 安満遺跡発掘調査報告書—9地区の調査—」高槻市教育委員会 1977

(8) 四柳嘉章「竹松遺跡出土の土器」『土師式土器集成 本編1 前期』 1971
植崎彰一編『世界陶磁全集2 日本古代』 1979

(9) 佐原真・町田章「和歌山市有本銅鐸」『和歌山県文化財学術調査報告書』第三冊 和歌山県教育委員会 1968

(10) 今里幾次「播磨弥生式土器の動態」『考古学研究』第16巻第1号 1969

(11) 寺沢 薫「大和の高地性集落」『青陵』No.36 榎原考古学研究所 1978
「瓜破北遺跡」財団法人大阪市文化財協会 1980

- (12) 名越勉・甲斐忠彦「スタンプ施文土器の新例」『考古学雑誌』第58巻第4号 1973の文様の分類に基本的に準ずる。
- (13) 表作成には、先に掲げた文献の他以下の文献に依拠した。
- 末永雅雄・小林行雄・藤岡謙二郎『大和唐古弥生式遺跡の研究』 1943
- 井藤暁子他『池上遺跡』第2分冊 土器編 大阪文化財センター 1979
- 井守徳男他『北摂ニュータウン内遺跡調査報告書Ⅱ』兵庫県教育委員会 1983
- 榎本誠一『日本の古代遺跡一兵庫県北部一2』保育社 1982
- 「亀井・城山」寝屋川南部流域下水道事業長吉ポンプ場築造工事関連埋蔵文化財発掘調査報告書 大阪文化財センター 1980
- 「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告52 百間川当麻遺跡2」岡山県教育委員会 1982
- 増田重信「連続渦文を施文せる弥生式土器片」『古代学研究』第12号 1955
- 「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告3 中国縦貫自動車道建設に伴う発掘調査1」岡山県教育委員会 1974
- 小林行雄「摂津国神戸市篠原遺跡に就いて」『史前学雑誌』第1巻第4号 1929
- 正岡睦夫他「雄町遺跡」『岡山県埋蔵文化財調査報告書』 1972
- 池畑耕一他「門前池遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告9』 1975
- 橋本惣司他「天神原遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告7』 1975
- 「会下山遺跡」芦屋市教育委員会 1964
- 藤沢一夫「上津島遺跡出土の連渦文弥生式土器」『豊中市史 史料編1』 1960
- 「吉備考古」第85号 1952
- 「吉備考古」第91号 1956
- 武藤誠『田能遺跡概報』田能遺跡発掘調査委員会 1967
- 浅岡俊夫他『荒神山遺跡調査概報』神戸市教育委員会 1970
- 「小杉町囲山遺跡緊急発掘調査報告書」富山県教育委員会 1970
- 「中峯遺跡発掘調査概報」倉吉市教育委員会 1975
- 「福井県鯖江市王山・長泉寺山古墳群」福井県教育委員会 1966
- 上田三平「若狭及び越前に於ける古代遺跡」『福井県史蹟勝地調査報告第1冊』 1920
- 堤圭三郎他『網野町文化財調査報告第1集 林遺跡発掘調査報告書』網野町教育委員会 1977
- (14) 註(11)寺沢論文
- (15) 隠岐郡西郷町に鳥形文・波形文・渦巻形文が肩部に施される子持ち壺が存在することを知った勝部 昭「西郷町発見のスタンプ施文土器」『八雲立つ風土記の丘』
- (16) 非日常的な性格を有する土器を意味する。